里山

1

里山編

四国山脈を見渡す満願寺からの眺望

菅野

菅野の山寺・満願寺境内からの眺望は、遥か遠くに四国山脈をも見渡す隠れた絶景スポット。戦国武将・毛利氏とのゆかりを秘める海頭山満願寺には、俗に「宙づり観音」と称される秘仏の本尊・十一面千手観音菩薩立像（市重要文化財）が安置される。

風景

2

里山編

辻堂（つじどう）のある風景

（前前後の辻堂）

菅野

民俗建築

辻堂とは、四本柱で三方ないし四方が吹きさらしの開放的な小さなお堂で、往来の道の傍らに建つ。旅人にとってはちょっと一休みや雨宿りする場、地元にあっては小さな信仰の場と同時に社交、憩いの場となった。市内では御調町内に多く70数か所を数え、こちらはその一つ、菅字前前後に建つ横峰地蔵堂。

3

里山編

柿の里の風景

標高250～300m、昼夜の温度差や霧の影響が無いなど、菅野地区は干し柿作りに適した環境にあり、最盛期には和歌山と生産量のトップを争うほどだった。秋から初冬の頃には、干し柿のカーテンが里を染め、遠近より写真愛好家が訪れる。現在は尾道柿園がその風物詩と歴史を守り継いでいる。

菅野

風景

4

里山編

圓鍔（えんつば）公園からの眺望

市

御調町出身の文化勲章受章者で名誉市民・名誉県民の彫刻家・圓鍔勝三氏（1905～2003）を顕彰する彫刻美術館の建つ圓鍔公園からは、市（いち）の中心部や中世の山城・雲雀（ひばり）山城のあった雲雀山を一望できる。

風景

5

里山編

旧市村郵便局

市

建築

日本の郵便制度が発足する明治4年（1871）の開局という歴史を持った旧市村郵便局の建物。母屋部分は江戸時代（後期）の遺構、洋館仕立ての店舗玄関部分は昭和4年（1929）の増築になると伝え、典型的な看板建築（店の表側部分だけ洋風に仕立てた建築）の一例。

6

里山編

旧村井医院（現まるみデパート）

市

建築

旧市村郵便局と同じく市の旧道（商店街）沿いに建つ医院跡の洋館建築（大正～昭和初期）。空き家の状態から再生され、平成24年（２０１２）からはカフェとまちづくりの発信拠点「まるみデパート」として生まれ変わった。

7

里山編

尾道鉄道の遺構（市駅跡の石積み）

市

鉄道

御調町市―尾道間を繋いだ私鉄・尾道鉄道（大正14年11月開通～昭和39年7月末完全廃業）のレールが敷かれた沿線には、消えた鉄路の記憶を留める遺構が点在する。市駅跡の中国交通市営業所裏の石垣も駅の遺構で、斜めの境目は市駅に隣接した荷物取扱所のホームの跡になる。

8

里山編

御調歴史民俗資料館傍の畦道

河内

長閑な里山風景のワンシーンは、丸河南（まるかなん）地区にある御調歴史民俗資料館傍らの畦道。見るからに歴史的建物の同資料館は、明治末期に河内村役場として建てられたもので、市の重要文化財でもある。

※マップ掲載の後、ほ場整備によってこの風景は消失。

9

里山編

高御調八幡神社の201段の参道石段

河内

石造風景

資料館に同じ丸河南にある高御調八幡神社の長い長い参道石段は、その数201段。4年に1度、各地区から奉納される「みあがりおどり」の行列一団は、この長い石段を練り進む。

10

里山編

御調の里山に秘める もう一つの真田伝説

河内

大坂夏の陣で奮戦空しく敗死した真田幸村には、豊臣秀頼と共に鹿児島へ落ち延びたという伝説がある。その派生・異説は各地に聞かれるが、御調の里山には、幸村の子・真田大助が落ち延び、この地で没したとの異聞が伝わる。伝説の地・徳永集落には、伝説を秘める真田姓が分布し、ゆかりのスポットも存在する。

民俗

11

里山編

真田の里の山中に立つ中世に遡る板碑

河内

歴史

石造

御調発真田伝説のシンボル的存在にあるのが徳永の山中に建つ石造物で、文化財的には板碑（いたび）と呼ばれるものになる。碑面には阿弥陀三尊の梵字と「妙音」「道徳」という僧名とおぼしき名、「天文十年」（1541）の年号を刻む。年代は一致しないものの、この碑は真田大助の墓ともされ、大助が秀頼生存を示す遺品を埋めたとも伝える。

12

里山編

徳永天満宮奉納の奮戦する若武者の絵馬

河内

民俗

真田伝説の里・徳永地区に鎮座する天満宮には、一枚の大きな絵馬が奉納されている。そこには騎馬武者と鎗を手に奮戦する若武者が描かれている。その表情は経年ではっきりしないが、この若武者は、或は真田大助なのかもしれない。寄進者には真田氏の名前が連名で見える。

13

里山編

豊後塚（ぶんごづか）

今津野

中世、関東から御調郡栗原の地に来着した武将・千葉豊後守直則の塚（墓所）を伝える。元々は本拠とした栗原（門田）に築かれたが、昭和46年（1971）に千葉豊後にゆかりある御調町今田・圓光寺の縁で、この場所に移築されたという経過にある。大理石製が目を惹く。

歴史 石造

14

里山編

大井手（おおいで）

今津野

田畑に水を送る為に築かれた、高さ5m・幅40mとスケールの大きいこの井手堰は、江戸時代の初めに因島村上氏（水軍）の将・村上彦右衛門通清の指揮の下、尾道福地の石工の手によって築かれたと伝える。その昔は子ども達にとって夏の格好の遊び場でもあった。

風景

15

里山編

槙田家住宅

江戸時代、当地の割庄屋を務めた槙田家の屋敷は、長い石垣の上に築かれている。調査資料によると、門は嘉永3年(1850)、本家・牛馬小屋・座敷は天保2年(1831)、湯殿は安政5年(1858)、土蔵は天明8年(1788)の建築遺構になるという。

今津野

石造建築

16

里山編

滝の観音

今津野

槙田邸から北方山間へ進むと、滝を背にした小さな観音堂がある。通称・滝の観音と呼ばれ、安産に御利益ありと信仰されている。後背に控える荒々しい岩肌を伝って清流が流れ落ち、ひんやりとした聖域がひっそりと佇む。隠れた御調の避暑スポットといえる。

風景

17

里山編

宇根の古道

綾目

歴史

風景

石見から尾道へ、銀を運んだ銀山街道の沿線には、当時の名残が各所に見られる。世羅と接する宇根地区の古道（1.2㎞）は、往時の場景を甦らせてくれるような風景。

宇根の古道から南へ、公文（くもん）～高尾を経て、御調高校前へと銀の道は続いてゆく。

18

里山編

岩倉の名水

岩倉寺堂の傍らに湧き出ずる水は、名水としてその名・味を知られ、遠方から汲みに訪れる常連の人も多い。地下108mから湧くその水は、宇根山山系の岩海（がんかい）の伏流水とされている。お堂の中には1016体に上る木造千体仏が安置される。

綾目

自然

19

里山編

小川家住宅

地元で養蚕業を興した小川家が、来客接待の迎賓館的な機能を兼ねて築造した豪壮な屋敷。主屋の他に土蔵、牛馬を飼育した小屋、使用人部屋、縫製工場等の建物も遺る。大林宣彦監督による新尾道三部作「あの、夏の日　とんでろじいちゃん」（平成11年・1999公開）のロケにも使用された。

綾目

建築

20

里山編

スサノオ宿る鎮守の杜（もり）

大和

民俗風景

宮崎アニメの世界にでも登場しそうな雰囲気あるこの鎮守の杜は、荒神（こうじん）さんを祀る神域。一見すると名も無きような小さな祠であるが、太古の昔、スサノオの神がこの地に宿られ、その所に祀ったとの縁起（えんぎ）が秘められる。

＊スサノオ＝ヤマタノオロチ退治で知られる神様。

港町

1

港町編

大岩に刻むお不動さん（瑠璃山の不動岩）

東久保

石造

瑠璃山（浄土寺山）山頂近くの巨岩で睨みを利かす不動明王の線刻。昔昔、このお不動さんが若かりし頃、歓楽街（新地新開）の賑やかな音色に釣られて、夜な夜な岩から抜け出し、馴染みの店で一杯、二杯と引っかけていたという愉快な民話を伝える。

2

港町編

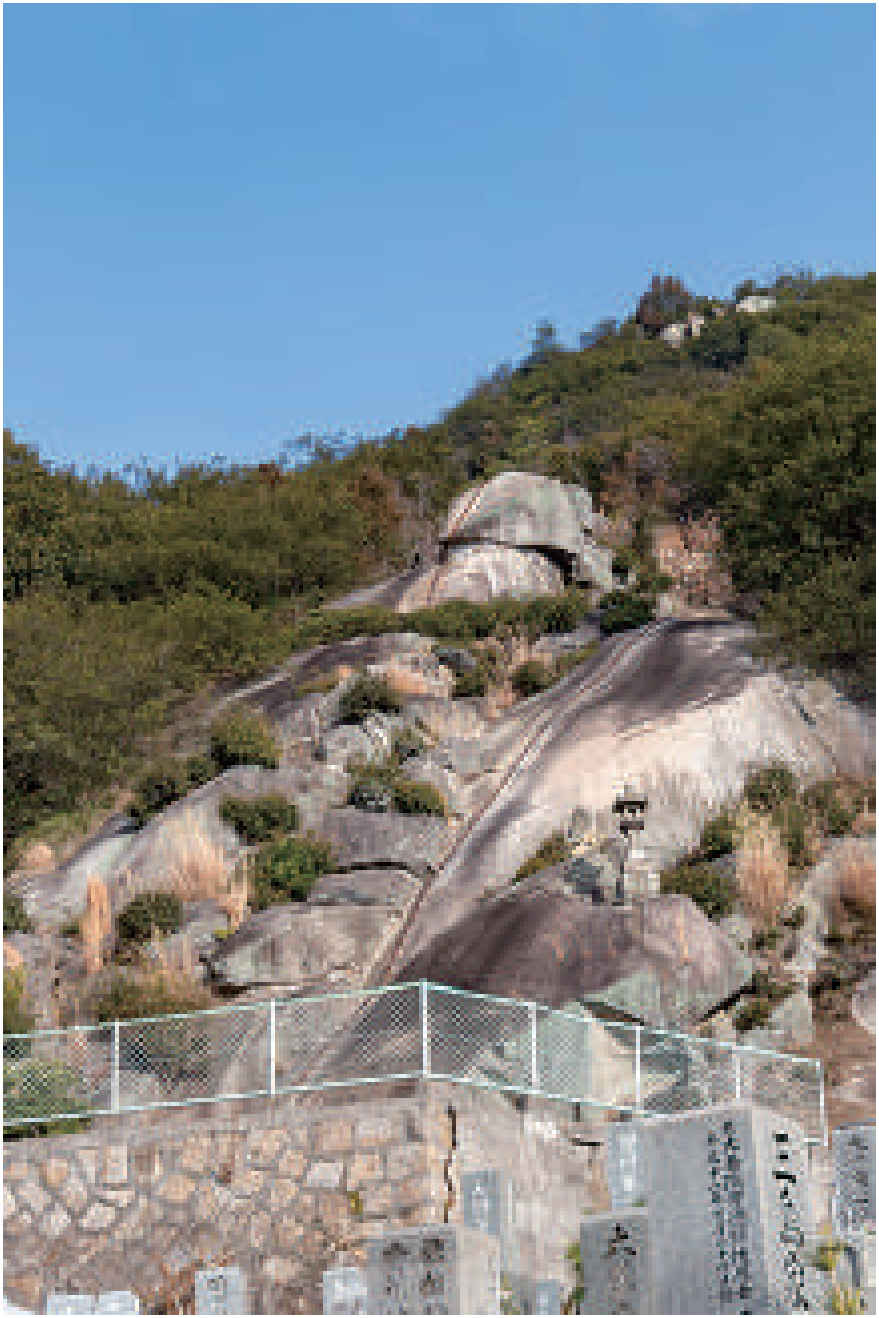
修験の山を伝える鎖岩（海龍寺）

東久保

石造

海龍寺境内から瑠璃山の岩山に掛かる鎖は、四国霊山石鎚山に倣った修験者（山伏）の修行場で、この鎖を伝って登拝した遺構。

浄土寺山・西国寺山・千光寺山と尾道三山総じて修験の痕跡が色濃く、千光寺境内にも鎖岩が見られる。



3

港町編

文楽の墓（海龍寺）

東久保

文化芸能

浄土寺再興に関わった定証（じょうしょう）上人が滞在した曼荼羅（まんだら）堂を前身とする海龍寺の境内には、文楽の墓と呼ばれる墓所がある。人形浄瑠璃太夫の初代竹本弥太夫（やたゆう）を偲んで江戸後期に建立されたもので、師匠を当地に招き、教えを乞うていた尾道の門弟達の建立になる。

4

港町編

防地川から移設された旧新橋（瑠璃橋）

東久保

海龍寺の墓所傍らに架かる石橋は、元々は防地川（防地口から海岸通りへ通じる道路となった・暗渠）の河口部に架かった橋で新橋と呼ばれた。大正天皇即位の御大典記念で石橋に改修された事を伝える記念碑と共に、現在地へ移設された経過。

石造

5

港町編

浄土寺山門傍の柔剛の碑

東久保

石造

唐獅子が両翼に配された石碑は、一つの石から彫り上げられた尾道石工の逸品の一つ。「柔能制剛弱能制強」（柔能く剛を制す 弱能く強を制す＝弱い者が逆に強い者を制する意のことわざ）を刻み、剣術流派・新影流の師範佐野甚十郎義忠の記念碑になる。揮毫（きごう）は『日本外史』で名高い頼山陽（1781～1832）と伝える。

6

港町編

姿三四郎のモデル 西郷四郎記念碑

東久保

柔道小説『姿三四郎』(富田常雄著)のモデルで、講道館四天王の一人でもあった柔道家・西郷四郎（1866～1922）は、その晩年、病気療養の為、尾道の地で過ごし、最期を迎えた。顕彰碑と銅像が立つこの界隈に所在した浄土寺末寺の吉祥坊がその終焉地となる。

7

港町編

山王（さんのう）さんの石猿

東久保

夏祭りの山王さん（山王祭）で知られる山脇神社の狛犬はお猿さん。山王神のお使いが猿である事に因むのだが、その昔、浄土寺山で山火事が発生した時、山の猿が鳴いて報せ、大事に至らなかったという逸話も秘める。拝殿の屋根瓦にもその姿が見られる。

石造

8

港町編

旧尾道高等女学校時代のレンガ塀（東高）

東久保

煉瓦

『放浪記』で知られる作家・林芙美子の母校である旧尾道高等女学校、現尾道東高校の塀は、レンガ造の趣きある情緒を漂わせる（大正期の築造）。物語のワンシーンとしてもおススメされるスポットで、全国ロケーションデータベースにも登録されている。

9

港町編

頼山陽遺墨の往来安全碑（最古の交通安全標識）

東久保

歴史

石造

この界隈に住まいした茶道藪内（やぶのうち）流宗匠・内海自得斉が、防地川（現防地通り）沿いに建立した往来安全を祈る碑（現在でいう交通安全標識）で、尾道に来遊した頼山陽にその揮毫を依頼した。防地通りはかつての西国街道筋であり、旅人の往来が多かった事を偲ばせる。

10

港町編

山陽鉄道時代のレンガ積高架 その1

防地口

鉄道煉瓦

現在の山陽本線、旧山陽鉄道の線路が尾道市街に敷設されたのは明治24年（1891）の事（尾道駅開業は同年11月3日）。市内各所に設けられた鉄道高架はレンガ積で築かれた。線路が複線化した後はコンクリで増設された経過がはっきりと分かる。

11

港町編

防地の茶堂 延命水（正念寺境内）

西久保

井戸

西国街道を往来する旅人が休息し、喉を潤したのが正念寺境内に湧く延命井の水・延命水。傍らに祀られる延命地蔵尊に由来するありがたい清水を求めて、遠近から汲みに訪れる常連ファンも多い。旅人に延命水による湯茶の接待を施した事から、同寺は俗に「防地の茶堂」とも呼ばれた。

12

港町編

時宗の伝統芸能「踊り念仏」

西久保

盆踊りのルーツとされ、能や狂言、出雲お国の歌舞伎踊りなどにも影響を与えたという「踊り念仏」は、尾道に色濃い宗派・時宗に発する芸能（鉦太鼓で踊りながら念仏を唱える）。本山の遊行寺（清浄光寺）他全国に僅か数例しか伝承されていない内の一例が、尾道の正念寺に伝承される。

民俗

13

港町編

軍配灯篭（久保亀山八幡宮境内）

西久保

台座に軍配の意匠を施した石灯篭から、「軍配灯篭」と呼ばれる。軍配と共によく見ると、扇の意匠も見てとれ、尾道石工の粋な遊び心が窺える作品。

同灯篭は尾道の港で活躍した力自慢の仲仕（なかせ）連中が寄進したもの。

石造

14

港町編

山陽鉄道時代のレンガ積高架 その2

西国寺下

鉄道煉瓦

No.10に同じく、山陽鉄道時代のレンガ遺構。

15

港町編

山陽鉄道時代のレンガ積高架 その3

常称寺下

鉄道煉瓦

No.10に同じく、山陽鉄道時代のレンガ遺構。

16

港町編

坂の町で唯一名を持つ レンガ坂

西久保

坂の町尾道の中で、名前が付された坂は長江と久保を繋ぐレンガ坂が唯一の例。レンガ坂以前、本来は「デンギ坂」と呼ばれ、デンギとは杖を指し、杖をつかなければ容易に上がれない急坂である為という。他に「ライギ坂」とする記載も古地図に見られる。

風景

17

港町編

大山寺境内から望む 甍（いらか）の家並み

長江

レンガ坂を上り切った先にある天神坊大山寺の位置から視界は開け、千光寺山（大宝山〈たいぼうざん〉）の東側面と長江の町並みが眺望できる。昔の名所絵葉書の題材としてもピックアップされた風景でもあり、その頃よりは減ってはいるものの、甍の家並みが比較的健在のように映る。

18

港町編

天神さんの五十五段の石段と石垣

長江

御袖（みそで）天満宮参道に映える55段の美しい石段も、尾道石工の傑作に数えられる逸品。54段は継ぎ目が無く、一段のみ意図的に継がれている。これは「満つれば欠ける」のことわざに倣い、完璧に胡坐をかくまいとの石工達の自戒が秘められる。大林宣彦監督作品（尾道三部作）「転校生」のワンシーンを飾った事も記憶に残る。

石造

19

港町編

ええ門は福善寺（福善寺山門）

長江

昔の尾道っ子が、「ええもん（お菓子等良いもの）ちょうだい」と親にねだると、親は「ええ門は福善寺、かたい門は持光寺」と返した。ええ（良い）門と唱えられた通りの立派な山門は、京都の大工が組み、それを尾道大工が現地で組み立てた作。両扉に配す鶴の丸、正面頭上にうねる龍は必見。

20

港町編

旧長江通りの畳表問屋街

福善寺門前に広がる通りは旧の長江通りで、虫籠（むしこ）窓が映える古い商家の建物が軒を連ねる。この通り・胡（えびす）小路一帯は「備後表」（びんごおもて）と称された畳表を取扱う問屋街だった所で、当時の面影を遺した歴史的町並みといえる。

長江

建築風景

21

港町編

山陽鉄道時代のレンガ積高架 その4

長江口

鉄道煉瓦

No.10に同じく、山陽鉄道時代のレンガ遺構。

22

港町編

長江小学校の長い石段

長江

西国寺山（愛宕山）西斜面地に位置する長江小へ続く石段も、天神さんの55段を凌ぐ更に長い石段として、長江の歴史的名物といえるもの。

長江小は、久保、土堂に続いて第三尾道尋常小学校として明治41年（1908）に創立の歴史を有する。

※令和7年4月より久保・土堂と統合して尾道みなと小学校となる。

石造

23

港町編

名誉市民山口玄洞創設の尾道南高校

長江

大正末に整備された尾道市の上水道敷設に対し、総事業費の４分の３に相当する巨額を寄付した尾道出身の大実業家・山口玄洞翁（１８６３～１９３７・尾道市名誉市民）の篤志により、大正９年（１９２０）に開校した尾道市立実業補習学校を前身とする市立定時制高校。

24

港町編

天下人接待の茶に用いた と伝える 柳水井（りゅうすいい）

長江

長江の路地裏にある「柳水井」と名づく井戸は、かの天下人豊臣秀吉の伝説を秘める井戸。朝鮮出兵で九州の名護屋城（佐賀）往来の道すがら、尾道にて休泊した秀吉は、地元の豪商笠岡屋小川氏から、尾道一と言われたこの井戸水を用いた茶の湯の接待を受けたと伝わる。現在は飲用不可。

井戸

25

港町編

茶園文化遺跡より 挹翠園（ゆうすい）跡を偲ぶ導水遺構

長江

歴史

千光寺山東斜面地の一角、山城戸（やまきど）と呼ばれる地区には、江戸時代に「挹翠園」という名の茶園（さえん）があった。茶園とは、別荘庭園を指した尾道独特の呼称で、尾道の有力町人が築いた夢の跡。挹翠園の庭には滝もしつらえられたようで、岩を刳り抜いた遺構はその水を流す為の造作と見られる。

26

港町編

加藤清正像を祀る清正公堂（せいしょうこう）

長江

歴史

熊本城築城で知られる戦国の勇将・加藤清正を祀るお堂・清正公堂（妙宣寺境内）には、等身大とされる衣冠束帯姿の清正公の木像が秘仏的に安置される。熊本復興祈念を目的に開扉されて以降、毎年5月に「清正公まつり」が執り行われ、多くの参詣客を見る。

※清正公まつりは、コロナ禍以降は規模縮小して法要だけ営まれている。

27

港町編

尻つめりの奇祭を伝えた幸（さい）の神の社跡

天寧寺下

民俗

幸神社の跡を伝える碑が建つ前は、「幸前（さいのまえ）」という町内が広がり、その町内の人々が奉仕した幸神の祭礼の夜には、子ども達が参詣客のお尻をつめって回る珍奇な風習が見られ、大いに賑わった。しかし戦時下に見られた強制建物疎開によって、鉄道沿線にあった社も町家も移転を余儀なくされた。

28

港町編

天寧寺の五百羅漢

東土堂

歴史

「海雲（かいうん）塔」と呼ぶ三重塔（かつては五重塔）を後背に配した天寧寺の羅漢堂には、526体の羅漢像が並ぶ。像は江戸後期の文化年間（1804～24）から明治の初めにかけて寄進されたもので、この内には自分に似た顔もあるんだとか。

29

港町編

通称・天寧寺坂

東土堂

天寧寺から三重塔に通じる坂道は、白壁の塀に茶園（さえん・別荘庭園）が並ぶ風情のある坂道。レンガ坂のような歴史的な名前は持たないが、通称として天寧寺坂と呼ぶ事もある。

風景

30

港町編

名誉市民三木半左衛門が切り拓いた旧公園（尾道共楽遊園跡）

東土堂

歴史

千光寺山中腹に広がる公園は、現在の千光寺公園（山頂から中腹にかけてのエリア）に対して旧公園と呼ばれる。千光寺山観光の礎となった場所で、名誉市民に列する三木半左衛門（1834～1912）が私財を投げうち、有志と共に奔走の末に築いた「尾道共楽遊園」の跡地である。

31

港町編

中村憲吉終焉の家（旧山中茶園）

東土堂

旧公園の傍には、アララギ派の代表歌人として知られる中村憲吉（1889～1934）が、転地療養の日々を過ごし、そして終焉を迎えた旧山中茶園（さえん）が建つ。その上は茶園であり旅館でもあった建物を再生した「尾道ゲストハウスみはらし亭」が位置している。

文化芸能

32

港町編

除虫菊発祥之碑

東土堂

瀬戸内海沿岸と島々で栽培が奨励された除虫菊は、蚊取り線香の原料となるもの。その奨励推進に当たった上山英一郎（1862～1943・金鳥こと大日本除虫菊株式会社創業者）を顕彰する為、昭和5年（1930）に地元の除虫菊同業組合によって建立されたもので、レリーフの人物は上山翁になる。

歴史

33

港町編

文学のこみち

文学のまち尾道に因み、昭和40年（1965）と44年（1969）の2期にかけて、尾道青年会議所が整備した千光寺公園の遊歩道には、尾道にゆかりある文化人25人の詩文が自然石に刻まれる。写真は林芙美子『放浪記』の一節を刻む石。

東土堂

文化芸能

石造

34 港町編

通称・出雲屋敷前の通り

東土堂

千光寺旧参道から信行寺へ通じる道は、天寧寺坂にも似た風情漂う小径。宿泊施設（せとうち湊のやど）として再生された大きなお屋敷は茶園の跡で、それ以前は「出雲屋敷」と呼ばれ、松江藩の出張所があったともいう。

風景

35

港町編

尾道文治の墓碑（信行寺墓所）

街中にあって、隠れ里ならぬ隠れ寺のようにひっそりと佇む信行寺は、尾道に来着し、尾道の人々に愛されながらこの地で没した謎の落語家・桂文治の墓が建つ。今に続く落語の名跡・桂文治とは異なる、もう一人の異端桂文治で、尾道の文治、旅の文治とも呼ばれたというから面白い。

東土堂

文化芸能

36

港町編

天春の石垣（旧天野春吉茶園）

三木半左衛門時代の千光寺への旧参道に次いで、新たに整備された新参道沿いに、まるで城壁を思わせるような石垣（高さ15m・幅40m）が築かれている。大正初期に築かれた茶園の遺構で、茶園の主・天野春吉に因み、「天春（てんはる）の石垣」と呼ばれる。茶園跡は宿泊施設（LOG）として再生されている。

東土堂

石造

37

港町編

酢瓶（すびん）の石垣

天春の石垣下から志賀直哉旧居へ抜ける道には、酢瓶をはめ込んだ石垣が見られる。尾道酢の始まりは一説に秀吉の朝鮮出兵の時代に遡るとも言われ、老舗の尾道造酢は本能寺の変が発生した年（天正10年・1582）の創業と伝える。

東土堂

風景

38

港町編

三軒長屋
～志賀直哉旧居～

東土堂

文化芸能

大正元年（1912）11月10日、志賀直哉は尾道に至り、翌年の11月15日までの約1年、土堂山手の三軒長屋に滞在した。ここで代表作『暗夜行路』の草稿が練られた。『清兵衛と瓢箪』、『児を盗む話』も尾道滞在をベースに書き上げられたものとして知られる。

39
港町編

万年井、又、亀山井戸とも

人口増に伴う水不足に悩んでいた尾道にあって、私財を投じて古井戸を浚い、別に新たな掘り起しにも着手したのが江戸後期の豪商で文化人でもあった亀山士綱（しこう）。文化3年（1806）に整備されたこの井戸は、「亀山井戸」とも、枯れる事知らずの願いを込めて「万年井」と名付けられた。

東土堂

井戸

40

港町編

光明寺下陸橋

光明寺下

鉄道建築

光明寺山門下、線路をまたぐ高架橋には、レールの廃材が用いられているのを知る人は少ない（昭和29年3月竣工）。国道脇の歩道から高架へ続く長い急坂も目を惹くところで、大林宣彦監督作品（尾道三部作）「転校生」の名シーン、小林聡美が自転車で一気に駆け上がった坂でもある。

41

港町編

尾道のネズミ小僧を伝える 三つ首様（海福寺）

西土堂

江戸時代の尾道に出没したネズミ小僧（盗品を恵まれない人達に与えた義賊）の３人組（惣兵衛・亀蔵・利助）が捕えられ処刑された。その後、海福寺住職の夢枕に現れた３人は、我々の首を供養してくれれば、首から上の病を治すと告げた。こうして懇ろに供養し祀られたものが「三つ首様」で、今も信仰を集める。

42

港町編

山陽鉄道時代の境界石

明治24年（1891）に尾道まで延伸した山陽鉄道（現在の山陽本線）の敷地境界を標示した埋め込み式の境界石は、海福寺下の他、沿線各所に見る事ができる。表面に刻む山型の印は、山陽鉄道会社の社章になる。

西土堂

他数カ所

鉄道

43

港町編

光明寺境内陣幕墓所の亀趺墓

東土堂

石造

尾道で修行を積み、第12代横綱となった陣幕久五郎とその夫人（夫婦墓）、夫人の父で尾道での陣幕の師匠だった初汐久五郎らの墓所。中央の亀が支える珍しい墓碑は「亀趺」と称され、殿様（藩主）や高僧、学者ら有力者の墓碑中に見られる形態。こちらの亀趺墓は初汐の師匠・外海定五郎の墓碑になり、碑文には「剛健勇毅力士」と刻まれる。

44

港町編

かたい門は持光寺（持光寺山門）

西土堂

No.19 福善寺山門の「ええ門」に対し、「かたい門」と唱えられた山門で、石造の山門は市内では唯一の例。どこか竜宮造りの構造物のようにも映る。

石造

45

港町編

平田玉蘊（ぎょくおん）の墓（持光寺墓所）

西土堂

文化芸能

江戸後期の尾道文化の中に可憐に咲いた一輪の花―平田玉蘊（女流画家・1787～1855）は同家の菩提寺である持光寺の墓所に眠る。この時代に女性一人の名で墓碑銘を刻むのは珍しい。背面と左右には、頼山陽の弟子・宮原節庵によって、玉蘊の経歴を刻む予定だったというが実現しなかった。

46

港町編

二階井戸

西土堂

井戸

山手斜面地ならではの工夫を見る、二階式構造を持つ特殊な井戸。持光寺参道沿いのものがよく知られるが、参道から土堂小へ抜ける小路の一角にも同様な二階井戸が見られる。

47

港町編

駅裏に映える 旧石井耳鼻咽喉科医院の建物

大正12年（1923）に開院した旧石井耳鼻咽喉科医院の建物も、久保小と並び広島県の近代化遺産にピックアップされる（報告書に登載）。

ルネサンス様式を近代化した白の映えるお洒落な外観は目を惹く。

西土堂建築

48

港町編

尾道駅北口に遺る 尾道鉄道の遺構

東御所

鉄道建築

尾道駅北口から連絡地下道へ通じる部分のY字形の上屋は、御調と尾道を繋いだ私鉄・尾道鉄道時代の遺構。尾道鉄道（オノテツの愛称で親しまれた）が尾道駅に接続したのは開業から8年後の昭和8年（1933）3月で、ここに御調町市―尾道駅間の全線が開通した。

49

港町編

西山手に広がる文化住宅街

西土堂

建築風景

尾道駅越しに山手を見上げると、特徴的な洋館建築が点々と見受けられる。洋館には日本家屋の母屋がセットにあり、和洋折衷のその様式は、大正から昭和の初めにかけて流行した「文化住宅」とも呼ばれるもの。シンメトリーな赤屋根の洋館は長屋形式で、先代駅舎のデザインともリンクしていた。

50

港町編

流転の先に落ち着いた 渚の女神

東御所

文化芸能

彫刻家・圓鍔勝三氏（1905～2003）作の女神像は、昭和29年（1954）に千光寺公園で開かれた「瀬戸内海観光博覧会」（通称・尾道博）のシンボルモニュメントとして、駅前の噴水公園に設置された。その後、幾度も場所を変えた末、平成13年（2001）の春、再び渚に相応しい現在地に落ち着いた。

51

港町編

映画館文化を伝える シネマ尾道（旧尾道松竹）

東御所

文化芸能

尾道に映画館文化の灯を守り続けるシネマ尾道は、昭和22年（1947）6月に開館した「松竹尾道」（松竹の直営）、次いで地元経営による「尾道松竹」（松竹撤退後は個人経営に）を前身とする市内唯一の映画館。映画上映だけにとどまらず、映画のまち尾道を民間の側から元気に発信し続けている。

52
港町編

海老屋小路改め「うず潮」小路

土堂1

路地

古くは「海老屋小路」と呼ばれたこの小路が、「うず潮」小路に名を変えたのは、昭和39年（1964）に放映され人気を博したNHK朝の連ドラ「うず潮」（林芙美子原作）から。芙美子の旧跡を伝える碑は、この時に地元有志が個人で建碑したものになる。

53

港町編

母校の下で微笑む 林芙美子像

東御所

文化芸能

本通り商店街西の入口に佇む芙美子像は、向島在の彫刻家・高橋秀幸氏の作で昭和59年（1984）に設置された。毎年6月に開かれる芙美子を偲ぶ「あじさいき」では、参列者の手で献花されたあじさいの花によって、像はしっとりと着飾られる。

54

港町編

林芙美子記念館奥に残る 芙美子旧居

土堂1

文化芸能

大正6年（1917）、家族と共に尾道へ降り立った林芙美子は、翌年から第二尾道尋常小学校（現在の土堂小）へ、次いで尾道高等女学校（現在の尾道東高校）へ通い、多感な青春時代を尾道で過ごした。旧居は女学校入学後しばらくまで間借りした家になる。

55

港町編

雨に濡れる風情もまたいい

石畳小路

観光ルートで整備された石畳ではなく、昔からの歴史ある石畳が映える小路。その昔は小路を下ると魚市場もあり、港町尾道らしい風景が広がった。

雨に濡れてしっとりとした小路の景も風情を誘う。

土堂1

路地

56

港町編

浮御堂跡界隈に埋まる謎の力石（ちからいし）

土堂1

民俗

石造

力石とは、重い石を持ち上げ、その持ち上げ如何で事の吉凶を占う古い風習であり、神仏への奉納としてもこれを行った事は、住吉神社や西国寺境内等にも見られるところから窺える。こちらの力石はどういう訳か地面に埋まり、頭部分が顔を覗かせている。

57

港町編

廃寺を伝える浮御堂（うきみどう）小路

土堂 1

路地

埋まり力石が見られる界隈には、その昔の昔（江戸時代）、「浮御堂」という名の、波間に浮くかの如き様の寺堂があった。

本通りからその界隈へ通じるこの小路は、その事を偲ばせる唯一の名残といえる。

58 港町編

アートな？曲線描く 曲がり

尾道郵便局前から東へ向けて、本通りの道はカーブを描いてゆく。かつては鍵状に折れ曲がっていたようで、この界隈を「曲がり」と通称していた。

アーケードを見上げると、曲がりの場景が更によく分かる。

土堂 2

風景

59

港町編

西京町か？西橋町か？

土堂2

路地

旧地名で「さいきょう町」という界隈にある小路。この「さいきょう」の「さい」は「西」であるが、「きょう」を「京」とする説と「橋」とする説に分かれる。

西京は西の京都（寺のまち）という意味から、西橋はこの界隈に豪商橋本家の分家・西橋本（西灰屋）の屋敷があったからと説明されるが、さて如何に？……。

60 港町編

デコボコ石畳の寺小路

土堂 2

路地

こちらも石畳を敷き詰めた小路であるが、デコボコと不揃いなところが逆に愛嬌を感じさせる。

小路名にある寺は、この北側（線路～山手）にあった念佛院（廃寺）と信行庵（現在の信行寺の前身）を指すのかもしれない。

61

港町編

昭和テイストな荒神堂小路

土堂 2

路地

西きょう（京・橋）町の東は荒神堂町になる。荒神堂とは、荒神様を祀ったお宮の所在からで、江戸後期の古地図を見ると、そのお宮（堂）は本通りに面した西角口、八百屋さん（閉店）の位置にあった。通りは当時の商店看板が多く残るなど、昭和の残り香を漂わせるような雰囲気。

62

港町編

職人のまちを伝える 鍛冶屋町小路

土堂1

民俗

路地

商人町であった尾道はまた職人の町でもあった。こちらは鍛冶屋の職人街であつた事から鍛冶屋町と呼ばれた。尾道鍛冶は、中世にあっては刀鍛冶でその名を広く知られ、国の重要文化財に指定される名刀を作刀した名刀工もいた。

63

港町編

職人のまちを伝える 杓屋小路（別名を叶小路）

久保 2

民俗

路地

杓屋小路と呼ばれるこの界隈は、柄杓や桶など木製品を作る職人街だった。叶（かない）小路という別名もあり、叶は「蚊がいない」という意味ともされ、弘法大師伝説の一例ともいえる民話も伝える。木工品の派生で、尾道の郷土玩具として知られる「田面船（たのもぶね）」も、この職人街で作られ、同作者の本城政吉氏は最後の職人だった。

64

港町編

本陣跡の豪商屋敷を伝える

小川小路

久保１

路地

小川町は尾道の古い豪商・小川家（屋号・笠岡屋）の屋敷地が広がった所。小川屋敷は江戸時代のＶＩＰ（大名や幕府高官等）が宿泊する本陣も兼ね、伝説では朝鮮出兵時、大坂と肥前名護屋（佐賀）を往来した豊臣秀吉が滞在したとも伝わる。

65

港町編

お稲荷さん映えの三好屋小路

久保1

路地

三好屋という屋号の商家屋敷があった事に因む。小路の中程には古風なお屋敷と並んで朱色が映えるお稲荷さんの祠（高尾稲荷）があり、情緒的な風景を見る。

新地新開の綺麗どころも信仰したこのお稲荷さんは、大林宣彦監督作品（新尾道三部作）「ふたり」のワンシーンにも登場した。

66

港町編

丹花小路の常夜灯と土蔵のある風景

久保1

路地

西国寺山から続く「丹花丘陵」に延びた小路であったが、鉄道・国道によって丘陵が分断され、小路も途切れる事になった（福善寺下の路地がその北半分）。丹花小路にはその昔に飴屋があり、そこへ夜な夜な女の幽霊が飴を買いに現れたという民話を伝え、それに因んだ「丹花飴」もあった。

67

港町編

橋本小路

久保1

路地

ノスタルジーにひたる路地風景。南を望むと真新しい市役所新庁舎が見え、変わらない尾道と変わりゆく尾道の風景対比もそこに映し出される。

橋本小路は豪商橋本家の私設道だったもので、その昔は本通りに面した西角に橋本玩具店もあった。東角地の老舗・秋元洋服店の建築美にも要注目。

68

港町編

旧住友銀行尾道支店の建物（市分庁舎）

久保１

建築

明治28年（1895）に住友臨時建築部（現日建設計）の設計、清水満之助（現清水建設）の施工で、住友銀行尾道支店として建てられた建物。石造・コンクリに見えて木造建築になり、住友と尾道の歴史も含め、建築的にも文化財的価値の高いもの（文化財未指定）。

69

港町編

旧諸品会所の土蔵（おのみち映画資料館）

久保1

建築

江戸時代に倉庫金融業として営まれた諸品会所（近代以降は諸品商社）の土蔵の一つで、古写真を見ると往時は三軒の土蔵が並んだ。後に精米所、次いで地元書店の倉庫となり、現在はおのみち映画資料館として活用される。

70

港町編

熊野権現へ通じる鎮神小路から築地小路へ

久保1

路地

ツインな小路は東を鎮神小路、西を築地小路という。鎮神小路の先には熊野神社（通称・熊野権現）が鎮まり、その下の井戸（水尾井）を経由して、西の築地小路から本通りへ出るのが正式なお参りルート。熊野権現の例祭（水祭り）は夏祭りで、水細工の人形舞台が涼を誘う。

※水祭りは毎年7月下旬の土曜日に同社及び水尾町内で行われる。

71 港町編

職人のまちを伝える 石屋町の海蔵寺小路

久保2

民俗 路地

鍛冶と並んで職人のまち尾道を代表したのが石工（石細工の職人）で、常称寺の門前に職人街としての石屋町が広がった。観光案内上では「石屋小路」となっているが、元々は「海蔵寺（かいぞうじ）小路」と古地図にあり、常称寺末寺の海蔵寺（廃寺）があったようである。

72

港町編

由来不明の風呂ノ小路

久保 2

路地

小路の北、鉄道を越えた先に「風呂」という字（あざ）名（小さい単位の地名）があり、そこからきたものか？

防地町には「鳥の風呂」というバス停もあり、風呂＝お風呂屋さん（銭湯）という単純なものではないようだ。

73

港町編

勧商場小路と（伝）雁木

久保2新開

路地

ここに見られる数段の石段は、一説に雁木とされ、船着場だったと見る向きもある。

商業勧奨の場として、明治・大正の頃には賑やかなマーケットだったらしく、芝居小屋もあった他、尾道商業高校の原初となる商人子弟養成の塾も開講されていたという。

74 港町編

日本最古？マンホールの蓋

久保２新開

民俗

勧商場の石段下にある古びた蓋はマンホールの蓋になり、一説に日本最古級？のものになるのではないかとも言われる。

赤瀬川源平氏らと共に路上観察学会を立ち上げ、マンホールの蓋観察で知られる作家・林丈二氏も着目した。

75

港町編

新開のメインストリート 仲之町通り

久保2新開

路地

尾道の一大歓楽街「新開」のメインストリートで、新開全盛期はお祭り騒ぎのような人出が毎夜見られたという。

この新開の中心部は遊郭街でもあり、尾道遊郭は全国の遊郭番付にも登載される歴史あるものだった。

76

港町編

新開の路上観察から 二ツ井戸

井戸が隣り合わせに並ぶまさしくの二ツ井戸（井桁にそれを刻む）。近接する井戸は他にも例があるが、井戸の名前はもとよりこの界隈を指しての呼称でもあったことが特色といえる。

久保2新開

井戸

77

港町編

石工の隠れた逸品
井隅（いすみ）神社の石祠

久保２新開

石造

井戸を前に、オール石造の威風堂々とした祠は、井隅神社（井隅八幡とも）。井隅は井戸の隅という意だろうか。

石祠の裏には石屋町の職人達がこれを寄進した来歴が刻まれ、細部の意匠にまで匠の技が見てとれる逸品的な祠である。

78

港町編

尾道町一の名狛犬（嚴島神社）

久保2新開

石造

そのスケールといいその造りといい、尾道一の狛犬と言ってもいい石工の名品の一つ。全て一つの石から彫られている玉乗り型の形式は、尾道型と称して尾道の特色のように説明されるが、玉乗り型が尾道石工に限った意匠という訳ではない。

79

港町編

民話を秘める かんざし灯籠（厳島神社）

久保2新開

石造

明神（みょうじん）さんこと厳島神社（現在は八坂神社も合祀）の鳥居の傍らに、かんざし型の石燈籠が建つ。悲恋の民話に語られる女性の霊を慰めるべく、町民有志が建立したもの。民話の詳細は案内板をご参照ください。

80

港町編

玄洞さんの実家があった ニシテラ小路

久保 2

路地

ニシテラ（西寺）とはこの北に位置する西国寺を指すものだろうか。この小路沿いに、水の恩人として語り継がれる名誉市民・山口玄洞翁の生家があった。

81

港町編

芝居小屋唯一の語り部 芝守稲荷

久保2新開

歴史 民俗

傍らの現尾道市教育会館には江戸時代、芝居小屋が設けられた。稲荷はその守護神として祀られたもので、当時は芝居小屋の奥にあったという。芝居小屋は後に「偕楽座（かいらくざ）」と称し、映画館、ボウリング場等の娯楽施設を経て、福祉施設、次いで教育会館と変遷したが、ここだけは変わらぬままの風景。

82 港町編

レンガ映えの橋本邸のレンガ塀

久保2

煉瓦風景

豪商橋本家の茶園(別荘)、後に本宅の屋敷塀として築かれたレンガ。調査した一級建築士で尾道市立大非常勤講師の渡邉義孝氏によると、積み方はイギリス積(長手だけ、小口だけと一段置きに積上げるスタイル)になるという。